

記憶の継承について

～未来の誰かに何かを伝えることはできるのか～

三上 喜美男

名古屋市立大学 22 世紀研究所特任教授
神戸新聞論説副委員長

I 過去、現在、未来

「われわれはすべて背中から未来へ入っていく、ということになるであろう」

作家の堀田善衛はエッセー集『未来からの挨拶』でこう書いた。

過去と現在は目の前にあって「見る」ことができる。だが未来は背後にあるので、「見る」ことができない。古代ギリシャの人たちはこのように考えたという⁽¹⁾。

確かに、私たちは過去の歴史に学び、現在の社会の姿などに目を凝らして、いきさつや意味を考える。その延長線上で未来をも予測する。しかし、未来を確実に見通すことはできない。予測はしても、本当にそうなるかは誰にも分からない。

私たちは現在と過去に目を向けてはいるが、未来には後ろ向きの姿勢で向かっていると見えるだろう。進む先に何があるかは確認できない。そのことを堀田は「背中から未来へ入っていく」というふうに表示したのである。

未来は捉えがたく、人間の予測は不確実なものだ。

作家アーサー・C・クラークと映画監督スタンリー・キューブリックが 1968 年に発表した SF 映画では、さまざまな形の宇宙船が地球の周囲に浮かび、人類は人工冬眠状態ではるか木星探査の旅に出る。映画のタイトルは「2001 年宇宙の旅」だった⁽²⁾。

映画が描いたのは、当時からみれば 33 年後の未来である。その 2001 年はとっくに過ぎ、私たちは 2016 年に生きている。最先端の科学技術を持ってしても人類が大気圏外に飛び出すのは至難の業だ。「宇宙の旅」はいまだに見果てぬ夢とっていい。

一方、映画で大型設備として描かれたコンピューターは飛躍的に小型化された。手に持ったスマートフォンと簡単な会話ができる時代である。映画で描かれた想像上の「2001 年」と私たちが知る 21 世紀の現実との違いはいろんな意味で興味深い。

私たちは過去と未来のはざまに立っている。そして、捉えどころのない未来について考えようとしている。私たちは背中に目がないから、「現在」と「過去」に目を凝らして思索を巡らせることになる。現在や過去にひそんでいる未来への手掛かり。それを堀田は「未来からの挨拶」と呼んだ。時空を超えた未来からの呼び掛けにどれだけ気づくことができるかが鍵となるだろう。

言い換えれば、未来について考えるということは、未来に何を引き継ぐかを考えることでもある。そのためには、記憶がどのように継承されていくかを知ることが重要になる。本稿では記憶の継承について考えたい。

この場合の記憶とは個々人の私的な思い出ではなく、地域や民族、国家といった人間集団で共有される「集合的記憶」のことをいう⁽³⁾。集合的記憶は、集団が形成された由来や特性を伝えるもの、自然災害といった災厄の共通体験を伝えるものなど、実に多様だ。いずれも「後世に伝えなければならない」という意志によって保持され、継承されていく。記憶の継承は、記憶を残すという使命感を引き継ぐことでもある。

II 800 年の時を超えて

クラクフという都市はポーランドの南部にある。南部といっても緯度では北海道より北になる。人口約 76 万人のこのまちは、17 世紀初めにワルシャワに遷都するまで長くポーランドの首都だった。世界遺産に登録されている旧市街地には旧王宮や教会などの歴史的建造物が数多く残されている。

クラクフを訪ねたのは 2014 年 10 月。ユダヤ人が大量虐殺された旧ナチスの強制収容所アウシュビッツ・ビルケナウはそこから数十キロ離れた場所にあり、ポーランド政府の手で博物館として保存、公開されている。その博物館を見学し、関係者や収容所生存者の証言を聴くのが旅の目的だったが、東欧の古都クラクフを歩き、その風情にも触れた。

多くの欧州の都市と同様、クラクフの中心部にも教会と広場がある。「聖マリア教会」はゴシック様式の建物で、広場を見下ろすように 2 本の尖塔がそびえ立つ。2 本の塔の高さは微妙に違い、高い方は地上 80 メートルある。

現地で購入したガイドブック（英語版）によると、現在の教会の主要部は 14 世紀、2 本の塔は 15～16 世紀に建てられた。中世には守備隊が塔の上からまち全体を見渡して火災の発生や敵襲来の警戒に当たっていたという⁽⁴⁾。

今も高い方の塔の上から消防士が火災発生に目を凝らしている。それだけでなく、1 時間ごとに塔の上からラッパを吹き鳴らすのも仕事とされる。ラッパの演奏はなぜかメロデ

イーが途中で途切れるのが特徴だ。

ラッパを吹く儀礼も中世から続いている。住民にとっては時報代わりになり便利だが、そもそもなぜ、そうした儀礼が始まったのだろうか⁽⁵⁾。

時は 13 世紀にさかのぼる。1240 年、モンゴル帝国の軍勢が大挙、ポーランドに侵攻した。東洋文庫の「モンゴル帝国史」(ドーソン著)によると、モンゴル軍は東部のルブリン州を攻め取り、いったん引き揚げた後、1241 年に再び姿を見せ、数度にわたって各都市に攻め寄せた。ポーランド諸侯の軍を撃破したモンゴル軍は勢いづいて首都クラクフに進軍し、国王である大公や住民が逃げた後の無人の都市に火を放った⁽⁶⁾。

モンゴル帝国の欧州遠征はチンギスハンの死後、孫のバトゥが率いて行われた。バトゥは最終的にモスクワやキエフを含むロシア、東欧の一部を支配下に収め、バトゥの子孫らは約 250 年にわたって広大な版図を統治することとなる。

ポーランド方面に進行したのはバトゥの本隊ではなく、いとこのバイダルが率いる一隊だった。クラクフなどを攻略したバイダルは東部のリグニツァ付近で欧州連合軍と激突する。連合軍はポーランド大公率いるポーランド軍と、十字軍遠征で名を上げたチュートン騎士団(ドイツ騎士団)などからなる精鋭だった。歴史に名高い「リグニツァ(リーグニッツ)の戦い」である。

結果は欧州勢が大敗した。モンゴル軍は勢いに乗ってハンガリーなどバルカン半島にまで攻め込む。欧州側は「地獄」を意味する「タルタルス」にちなんでモンゴル人を「タルタル人」と呼んだ。「地獄から来た恐怖の蛮族」といった意味だろう。今もモンゴル人やその配下にいたトルコ系の人たちを「タルタル人」と表記している本がある。

東アジアのモンゴル草原と欧州は地続きだ。ユーラシア大陸の中央部には広大な草原が広がる。当時、ユーラシア大陸は多くの王朝が割拠する四分五裂の状態だった。その大陸が突如現れたモンゴルの勢力によって大きく一つに結ばれた。東洋と西洋、中東地域、アフリカ北部を含めた広大なエリアが、同じ「世界」として初めて人間の視野に入ったことの意義は大きい⁽⁷⁾。

日本から西欧までが同じ絵図に描かれた世界地図なるものが誕生したのはこの時代とされる。ベネチアの商人マルコ・ポーロがはるかモンゴル、中国を訪ねて記したとされる「東方見聞録」が刊行されたのもこのころである。

ただ、ステファン・キェニューヴィッチ編「ポーランド史」(1986 年、恒文社刊)などのポーランド史の概説書には、モンゴルのポーランド侵攻はごく簡単な記述しか見当たらない。クラクフのガイドブックも、歴史叙述の中で「1241 年に「タルタル軍が南ポーランドに侵攻した際、クラクフは甚大な被

害を被った」と述べるにとどまっている⁽⁸⁾。

ポーランドではモンゴル侵攻は民族的な受難だが一時的な災厄にすぎないという捉え方なのだろう。バトゥの侵略後も長くモンゴル帝国に支配され、「タターのくびき」といわれる圧政と搾取を受け続けたロシアとは、そもそもモンゴル侵攻という出来事の深刻度が違うように思われる。

それでもクラクフなどポーランド側が受けた被害は大きかった。モンゴル軍の襲来は、クラクフなどの都市にとって一大事だったはずである。実は、先ほど紹介した教会の塔の儀礼は、モンゴル軍侵攻時の記憶をとどめている。見張りの兵士が懸命にラッパを吹き鳴らして伝えたのは、モンゴル軍の襲来だったのである。

モンゴル軍の姿を確認したラッパ奏者は住民に危機を伝え始めた。だが、モンゴル兵が放った矢に射貫かれて絶命したと伝承は伝える。だから吹き鳴らされるラッパの音色は途切れる。その逸話を忘れずに継承してきたのは、途切れたラッパの音色がクラクフにとって忘れがたい苦難の始まりを告げていたからだろう。

その故事にちなんで1時間ごとに塔の上でラッパを吹き鳴らす儀礼が始まったとされる⁽⁹⁾。そこには単に過去の痛恨の体験を継承するだけでなく、「怠らず外敵の侵略に備えよ」という警鐘の意味があったはずだ。

記憶は言葉で語り、文字に記すだけではなかなか共有、継承されない。記憶をラッパの定時演奏として儀礼化し、世代から世代へと受け継ぎ、守る。併せてその由来を語り続ける。そうした営みの継続によって次の世帯は苦難の歴史を知り、「外敵への警戒を怠るな」という教訓を過去からバト



写真 1

ンタッチすることになる。儀礼化は記憶の風化を防ぐための知恵といえるだろう。クラクフは800年近くも記憶をラッパの儀礼で伝えてきた。

現在の聖マリア教会はモンゴル侵攻の後に建設されたものだ。それ以前は同じ場所にロマネスク様式の旧教会があったとみられる。おそらくラッパの儀礼は旧教会のころには既にあったのだろう。あるいは後世のある時期に何かの理由で受難の記憶が掘り起こされ、始まったのかもしれない。いずれにしても、儀礼という伝統的、文化的な営みが記憶の継承に

果たす役割は大きいように思われる。

もう一つ興味深いのは、モンゴル襲来の記憶がクラクフ恒例の祭りにも残っていることである。毎

年6月ごろカトリックの「聖体の祝日」に「ライコニク祭り」が開催され、張りぼての馬に入った「ライコニク」という人物が登場して街中を行進する。とんがり帽子と黒いひげ面。それは馬に乗ったモンゴル兵の姿をイメージしたものだという(写真1)。

現在のライコニクには「鬼」のような怖いイメージはない。観光客にも人気者の「ライコニクおじさん」は、欧州を蹂躪した恐ろしいモンゴル軍の兵士と違って、街に幸福を運ぶとされる。忌まわしい外敵の姿が長い歴史の中でいつしか「福」をもたらす好ましいキャラクターに転化したことになる。

モンゴル兵のイメージを幸福の運び手に変えることでトラウマが癒やされる。それは結果的に、かつての敵に「赦し」を与えたことにもなるだろう。かつての災厄を「平和と幸福の祭礼」に昇華することで、侵略を受けて傷ついたポーランドの民族的な誇りが回復したともいえる。

Ⅲ 戦後ドイツの取り組み

舞台をドイツに移したい。

クラクフ訪問に先立って首都ベルリンを訪問する機会を得た。その際、記憶の保存と継承に力を入れるドイツ社会の取り組みの一端に触れることができた。

ティアガルテン地区はベルリン中心部にある公園だ。緑豊かで広大な敷地には動物園があり、ドイツが誇るベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートホールも建っている。ホール前の広場に小規模なモニュメント(記念碑)が設置されたのは2014年9月。その地を訪問する1カ月ほど前のことだった。

コンクリート製の細長い陳列台が屋外に置かれている。見学者は写真やビデオ映像、説明文、地図などに目を通しながら横に歩く造りだ。表面のガラスは真新しい光沢を保っていた。

展示されているのは、戦前にナチスが行った「T4作戦(アクション T4)」の資料である。この作戦は優秀な「アーリア人」の血統を守るという優性思想に基づいて障害者を「安楽死」させるものだった。殺害には毒ガスや一酸化炭素が用いられた。後のアウシュビッツなどの強制収容所で行われた大量虐殺の原型となったとされる⁽¹⁰⁾。

T4作戦の犠牲となったのは障害者だけではない。治癒の見込みがないとされた重篤な病人や同性愛者、登校拒否の児童生徒、ナチス統治に抵抗する社会活動家、脱走兵なども殺害された。その数は文書資料に残っているだけで約7万人、実数は20万人ほどとみられる。いずれもナチスによって「不要」とされた人たちで、差別的思想がもたらした犯罪行為といえる⁽¹¹⁾。

Tドイツは戦後、ナチスによる戦争犯罪を自らの手で追及し、今も関係者の訴追を続ける。4作戦についても戦後、研究者らによる調査がなされた。しかし、その内実は一般のドイツ人に知られるこ

とはほとんどなく、事実上「忘れられた歴史」となっていた。

戦後 70 年の前年にモニュメントが建設されることになったのは、自分の叔母が T4 作戦の犠牲になっていたことを知った一人の女性が事実の公表を求める声を上げたことがきっかけとされる。ティア



写真 2

アガルテンに設置されたのは、まさにそこに作戦の本部があったからである。作戦名の「T4」は本部所在地の「ティアガルテン通り4番地」を意味している。

現地を訪れた際、スイスから観光に来た女性が展示に見入っていた。小学校の教員をしているが、障害者などの強制的な「安楽死」については知らなかったという。「この事実をしっかり伝えなければいけない」と話す一方で、「自分が教えている児童たちに教えるのにはため

らいを覚える」と戸惑いも見せた。「教えるなら、子どもらがもう少し年長になって判断力が付いてからの方がいいのでは」とも語った(写真2)。

ベルリンにはナチス時代の過去を伝える施設や博物館が少なくない。どれほど忌まわしい過去でも事実を正確に後世に伝える。そういった意気込みが伝わる。T4 作戦のモニュメントも、ドイツが誇るベルリン・フィルのホールの前によく目に付く形で設置された。モニュメントの存在自体が、歴史を伝えるための、未来への「刻印」と言っていいたいだろう。

ゆかりの場所に、写真などの資料を展示して事実を正確に伝える。それは記憶の保存と継承を目指す正攻法の取り組みといえる。観光などで足を運んで史実を学ぶ人も少なくない。記念碑の存在が撤去されたりしない限り、記憶の装置が都市の一部として生き続ける仕掛けである⁽¹²⁾。

それとは毛色の異なる取り組みもみられる。「つまずきの石」と呼ばれるアートプロジェクトがそれだ。

ナチスによるユダヤ人虐殺の犠牲者は欧州全体で約 600 万人とされる。その事実を直視し過去に学ぶためにアウシュビッツなどの強制収容所跡は保存された。ベルリンにもベルリン・ユダヤ博物館などの施設が置かれている。そこで人は実物資料を目にし、実際に虐殺が行われた現場を歩いたりガイドの説明を聞いたりする。見学者に「学ぶ」姿勢が求められる。

しかし、それでは情報伝達は一方通行になりがちだ。学んだことを脳裏に刻み込むには、印象を自分の言葉で表現する、自発的な行為が不可欠になる。そのためには展示する際に情報を受け取る側が内容や意味などを自由に考える余地を残しておくことが大切だ。美術館・博物館の展示は見せるだけでなく、ワークショップなど「学び」の機会となる参加型の工夫がなされていることが多い。

そもそもアートは一つの決まった見方を押し付けるものではない。解釈は見る側に託されている。多様な受け止めが出来る作品ほど、印象に残り、より深い感銘を与える。

「つまずきの石」はそうしたアートの発想で提案された記憶の保存と継承の試みである(写真3)。



写真 3

「真ちゅうのプレートが付いた敷石には氏名と生年、強制退去させられた年、その後の運命が刻まれている。ベルリンのアパート前の路上に二つの『つまずきの石』が埋め込まれると、学生らが白いバラを次々に手向けた」

2014 年6月 20 日付けの神戸新聞夕刊に掲載された記事はこんな描写で始まる。共同通信が配信した「平和国家どこへ ドイツの戦後」という連載企画の4回目で、「迫害された個人悼む敷石」の見出しが付けられている。筆者は大西利尚ベルリン支局長(当時)である。

約600万人もの犠牲者。それだけでも戦慄すべき数字だが、犠牲者の一人一人には名前があり、それぞれの人生があり、家族や友人がいた。個人を襲った理不尽な運命に焦点を当てることで、強制収容や虐殺といった行為の非道さに自分を重ねて考える。それが狙いだ。

プロジェクトはグンター・デムニヒというアーティストの呼びかけで始まった。参加者はそれぞれのまちで犠牲者の名前などを真ちゅうの銘板に刻む。それを敷石に貼って犠牲者の住居があった場所近くの路上に埋め込む。

犠牲者の生年月日、連行された日付、殺害された日付と場所…。参加者は亡くなった人について多くのことを調べなければならない。アウシュビッツで殺害された人の場合はその事実を銘板に明記する。そして参加者みんなで故人を追悼しながら路面に設置する。かつて生存していた「その人」の存在に思いをはせ、なぜそのようなことが起こったのかを考える。

「歴史は机の上で本を広げて学ぶものではない。日常生活から学んでいくべきだ」というのが、提唱者デムニヒの考えだ。参加者は学生ら一般市民で、プロジェクトは学校の歴史や反差別教育にも活用されている。歴史を自分の脳裏に刻む体験型学習の試みといえるだろう。

取り組みは欧州全体で 16 カ国に広がり、約4万5000人分の「つまずきの石」が埋められたという。

神戸新聞 2014年06月20日 金曜日 面名 タN タ4 5ページ

芸術家のグンター・デム
うした人たちがかつて住
んでいた家の前である。

迫害を受けた個人悼む敷石

「つまずきの石」は、こ
うした人たちがかつて住
んでいた家の前である。
つまずきの石は、こ
うした人たちがかつて住
んでいた家の前である。

共感呼び、教育にも一役

ドイツの首都ベルリンで、新たに埋められた
「つまずきの石」にバラを手向ける生徒たち
3月
(共同)



ベルリンではつまずき
の石を若者の啓蒙、反差
別教育に役立てている。
3月に行われた石を埋め
込む行事には、中学・高
校に相当するギムナジウ
ムの生徒20人ほどが出席
した。この日埋められた石に
名前が刻まれていたのは、
アルゼンチンに亡命
したユダヤ人のジャズ音
楽家夫妻だった。生徒た
ちは2人の経歴を再念に
調べて発表し、ギターを
弾き、歌をかけた。その
場には種族の姿もあ
った。2人のおおいの息
子に当たるカルロス・シ
ユビラーさん(15)は
「本当に感謝している。
こんな素晴らしい活動は
ない」と目を潤ませてい
た。(ベルリン共同)

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

平和国家どこへ

ドイツの戦後

④

街歩きしていて、つま
ずきの石に気付く。そこ
ではナチスの絶滅政策の
対象となったユダヤ人や
少数民族ロマ、同性愛者
が生き延びていた。ユダヤ
人だけで600万人とい
われる犠牲者全体はもち
ろろ、一人一人を悼みた
い。デムニヒさん(はら
う)は、
「つまずきの石は、こ
うした人たちがかつて住
んでいた家の前である。」

追悼の対象も、ユダヤ人だけでなく、ナチスに虐殺された少数民族ロマや同性愛者などが含まれている。

体験学習にもさまざまなやり方がある。例えば、ドイツのギムナジウム(日本の中学・高校に当たる)では、アウシュビッツで現地学習をした生徒に、自らが語り部になって他の生徒に説明する課題を課している例がある。

「つまずきの石」はそうした体験発表型の学習とも異なる。重要なのは、一人一人が学んだ成果を敷石の銘板という形に託して自ら都市の中に差し込むという小さな行為の集積だろう。参加者が増え、活動が広がるほど、記憶を刻んだ「石」は街角に増えていく。

人は欧州のいろんな場所で「つまずきの石」に出会う。石を見て想像力を働かせる。名前を刻まれた誰かの運命に思いを巡らせる。家族や友人らと話し合う機会にもなる。それが過去について深く考える入り口になる。

再開発などで都市の形状が変わらない限り、膨大な数の敷石は大きな記憶の集合となっ

て何かを未来へと伝え続ける。それをどう解釈するかは未来の人に託されている⁽¹³⁾。

ドイツでは、自国の加害の歴史と向き合い、内外にもたらした被害を記録・保存する多様な努力が国を挙げてなされてきた。例えば戦時中、強制労働に動員した外国人に対する補償をドイツは官民で実施した。政府の呼び掛けで企業が出資して基金をつくり、約160万人に計7000億円を支払った⁽¹⁴⁾。基金を運営する財団は「記憶・責任・未来」と名付けられた。過去の責任を自覚し、記憶を未来につなげる。戦後のドイツが掲げ続ける国家の基本姿勢といえる。

しかし、どんなに「伝えなければならない」とされた記憶でも、いつしか薄れ、途切れてしまう恐れがある。神戸、阪神間の都市部と周辺地域を襲った直下型地震「阪神・淡路大震災」の発生から20年余を経た被災地では、災害体験の「風化」を懸念する声が高まる。

大津波が東北の沿岸を襲った大災害からまだ5年半の東日本大震災の被災地でも、体験を継承する取り組みの必要性が声高に叫ばれる。

戦後70年が過ぎた被爆地の広島、長崎や、先の大戦で壮絶な地上戦が展開された沖縄でも同じような状況にあるという。「絶対に繰り返してはならない」と記憶の継承に特段の力を入れている地域ですら、実体験者が少なくなるにつれ「何もしなければ伝わらなくなるのでは」と多くの人が考えるようになってきた⁽¹⁵⁾。

記憶の継承とは「風化」とのたゆまぬ戦いともいえるだろう。

IV 新たな「伝承」

東日本大震災は津波による大災害だった。高台にいち早く避難した人は助かり、逃げ遅れた人は多くが亡くなった。地元の新聞記者でさえ、地震と津波の警報を聞いた直後に海岸に走り、写真を撮ろうとした人がいる。東北地方で近年人々が体験した津波はたかだか数十センチ程度の高さにすぎなかった。だから「津波」と聞いて、記者はいつものように海を不安げに見守る住民の写真を収めようとしたのである。

その記者は迫る大津波に気づき、乗っていた車を放置してほうほうの体で坂道を駆け上がって難を逃れた。さっきまでいた海沿いの市街地は直後に波にのまれたという。

「津波てんでんこ」という言葉がある。「てんでんこ」とは「めいめいばらばらに」という意味の方言だ。東北の三陸海岸には「津波が来たらめいめいばらばらに逃げろ」という伝承があるという教訓的な話がメディアにも登場し、広く流布している。

しかし、実はそんな「伝承」などなかった。そう述べていたのは誰だろう、この言葉を広めて自著のタイトルにもした津波研究家、山下文男である。

1924（大正13）年に三陸で生まれた山下は明治の三陸津波で一族9人を亡くしている。そうした体験もあって全国の津波被害の歴史をくまなく調べ、民間の津波研究の第一人者となった。東日本大震災のときは入院先の病室で海水につかり、自身も命の危機に直面した。その体験が影響したのか、その後に体調を崩して亡くなった。

生前、山下はこう述べている。1933年の昭和三陸地震で津波に襲われたとき、父親は末っ子の山下の手も引かず自分だけ一目散に逃げ出した。そのことを後で母親がなじったら、父親は「なに！ てんでんこだ」とむきになって抗弁した。「津波のときは家族であろうが一人一人ばらばらに逃げるものだ」と。その逸話を講演で語ったのがきっかけで、「てんでんこ」の伝承がもともと地元にあったという話になった。山下の講演を聞いた学者がその話をあちこちで紹介したためともされる⁽¹⁶⁾。

津波が来たら自分だけでも早く逃げる。父親にそうした意識があったとはいえるだろう。ただ、言われるような地域の伝承ではなく、個人の思いであった。むしろ過去繰り返された津波被害の大きさを考えれば、「とにかく一人でも早く逃げろ」という教訓は、残念ながら三陸でも口から口へとあまねく継承されてはいなかった。

山下の語った話がこのたびの大災害を機に再び注目され、津波からの早期避難と自己判断の大切さを伝える「伝承」がいま、生まれつつあると言えるのではないか。

人間の記憶とはいかにも頼りなく、捉えどころのないものだが、長く伝わる記憶にはどこか人の心を引きつける力がある。その多くが物語や伝承のように親しみやすく覚えやすい形をとっている。継承される記憶には昔も今も変わらない条件があるのだろう。

今度こそ「てんでんこ」の教訓は、子どもたちの、子どもたちの、子どもたちへと、地域で長く継承されていく可能性がある。そう信じたい。

V 終わりになき旅

私たちは過去から未来へと流れる時間の中で生きている。人類の歴史は世代から世代への記憶のリレーといえる。地域伝統の祭りも、言葉も、食べ物も、過去から受け継いだ文化であり、私たちが私たちであることの「証し」と言っていいたい。

だが私たちは過去についてどれだけ知っているというのか。とりわけ遠い昔のことについては知らないこと、分からないことばかりではないのか。

文字や絵などの記録が残されている時代のことはある程度理解することができる。記録がなくても、遺物や遺跡などを通してかつての人間の生活に迫る方法もある。言い伝えや昔話などの口承文芸、伝統文化の歌や踊りなどで過去をたどることもできるが、歴史を「学ぶ」努力なくして過去を深く知ることはできない。

一方で、人類社会は今、1万年から10万年も先の未来を見越した記憶の継承という課題に直面している。東日本大震災の福島第1原発事故でも突きつけられた放射性廃棄物の処分の問題である。地下深くに埋めた「核のゴミ」の危険性をはるか未来の人たちにどのように伝えるか、世界中が知恵を絞っているが、まだ答えは見いだせていない。何万年も先の未来への記憶継承の問題については、次の機会に考察したい。

本稿では取材体験を基にした人間の集合的記憶の継承について考えた。私たちは過去についてよく知らないが、未来への責任から逃れることもできないのである。過去と現在に学びながら「未来からの挨拶」を探す旅を続けるしかない。

私たちは未来の誰かに何かを伝えようとする。それは本当に伝わるのだろうか。

(文中、敬称略)

- (1) 堀田善衛「未来からの挨拶」筑摩書房、1995 年、201-206 頁。この中で堀田はハリウッド映画「Back To The Future」(邦題バック・トゥ・ザ・フューチャー、1985 年公開)のタイトルの「未来にバックする、戻る」という発想に興味を示し、その根底には古代ギリシャの過去、現在、未来の捉え方があると言及している。
- (2) SF 映画の金字塔とされる名作。道具の使用で文明に目覚めた人類が 21 世紀初めに宇宙船で土星探査に出発する。月面で発見された謎の物体「モノリス」が人類を土星へと導くのだが、人工知能が反乱を起こすなど、今の時代にも通じる内容が多い。
- (3) 「集合的記憶」についてはフランスの社会学者 M.アルヴァックスの「集合的記憶」(行路社、2015 年)を参照した。アルヴァックスは個人的な記憶と社会的な記憶を区別する必要があると強調している(48 頁)。
- (4) “THE GOLDEN BOOK・KRAKOW” BONECH-GALAKTYKA, 2013
- (5) クラクフの伝統行事や文化財についてはポーランド政府観光局公式サイトなどが参考にある。各種ガイドブックでも詳述されている。
- (6) 東洋文庫「モンゴル帝国史」平凡社、全 6 巻 1968-1979 年。モンゴルによるポーランド侵略については 2 巻 162-171 頁に記述されている。著者のアブラハム・コンスタンティン・ムラジャ・ドーソンはスウェーデンの外交官で歴史家。トルコ生まれでアルメニア系の出自を持つ。
- (7) 西欧による大航海時代に先駆けて、モンゴル帝国による東西の結合が本当の意味での「世界史」の幕開けとなった。そうした見方は岡田英弘「世界史の誕生-モンゴルの発展と伝統」(ちくま文庫、1999 年)や杉山正明「世界史を変貌させたモンゴル-時代史のデッサン」(角川叢書、2000 年)などで示されている。
- (8) “THE GOLDEN BOOK・KRAKOW” 4 頁。
- (9) 英国の映像作家ロバート・マーシャルは著書「モンゴル帝国の戦い」(東洋書林、2001 年、遠藤利国訳)でこう述べている。市門の前に姿を現したモンゴルの偵察隊がラッパの音色に気付き、矢を放った。奏者は喉を射抜かれて塔から落下した。住民は撤退を始め、モンゴルの主力部隊が到着したときは街は無人と化していた。
- (10) T4 作戦は、NHK が 2015 年 11 月 7 日放送の ETV 特集「それはホロコーストの“リハーサル”だった 障害者虐殺 70 年目の真実」で取り上げ、反響を呼んだ。筆者自身も 2014 年 10 月 19 日付「神戸新聞」日曜小論「今も過去と向かうドイツ」で取り上げた。
- (11) 2016 年 7 月、神奈川県相模原市の障害者施設で入所者 19 人が元職員の男に殺害される事件が起きた。容疑者の男は「障害者は不幸をつくる」「障害者の安楽死を国が認めないので、自分がやるしかない」などと犯行を正当化する供述をし、ナチスの思想にも関心を示したとされる。T4 作戦などの影響が指摘されている。
- (12) T4 作戦のモニュメントと併せて「虐殺されたユダヤ人のための記念碑」ともいわれる「ホロコースト記念碑」を見学した。2005 年 5 月、ベルリンのブランデンブルク門の南、ナチス親衛隊本部があった場所に開設され、敷地約 2 万平方メートルは阪神甲子園球場のグラウンドより広い。コンクリートの石碑 2711 個がグリッド状に並び、中を迷路のように歩く構造で、地下にホロコーストに関する情報センターを併設している。
- (13) 街中に記憶の痕跡を刻印するアートとしては、他にフランスの美術家クリスチャン・ボルタンスキーがベルリンで制作した屋外作品「欠けた家」がある。第 2 次大戦末期に空爆で破壊された住居跡でそこに住んでいた住民の氏名、居住期間、職業をプレートに記して隣の建物の壁に掲げている。強制収容所に送られたユダヤ人の名前もある。香川檀「想起のかたち 記憶アートの歴史意識」水声社、2012 年、93-105 頁
- (14) ナチスの強制労働の被害者は旧ソ連・東欧などから徴用され、戦後、米国など世界各地に移り住んだ。基金による被害者への補償は法的賠償ではなく人道的な措置という位置づけだが、フォルクスワーゲン、ダイムラー、シーメンスなどドイツ企業約 6500 社が出資した。共同通信の森保裕編集委員の記事「続く若いプロセス」(2015 年 1 月 19 日)が経緯を

簡潔にまとめている。

(15) 例えば NHK が 2015 年 6 月に行った原爆意識調査（広島・長崎・全国）によると、原爆投下の日付（広島 8 月 6 日、長崎 8 月 9 日）を答えられない人は全国で 7 割に上った。広島、長崎でも 3、4 割が不正解か「知らない、分からない」と答えている。広島の人に長崎の原爆投下、長崎の人に広島の人原爆投下の日付を聞けば回答率はさらに低くなる。

沖縄でも朝日新聞社と琉球タイムス社、琉球朝日放送が昨年 6 月に実施した沖縄県民世論調査で、沖縄戦の記憶が「風化している」とした回答者が 68%に上った。

(16) 山下文男「津波てんでんこ」新日本出版社、2008 年。231-233 頁

参考文献

- 堀田善衛「未来からの挨拶」筑摩書房、1995 年
堀田善衛「時間」岩波現代新書、2015 年
E・H・カー「歴史とは何か」岩波新書、1962 年
M.アルヴァックス「集合的記憶」行路社、2015 年
T・M・スズキ「過去は死なない メディア・記憶・歴史」岩波現代文庫、2014 年
“THE GOLDEN BOOK・KRAKOW” BONECHI-GALAKTYKA,2013
キェニューヴィッチ編「ポーランド史」恒文社、1996 年
A・ジョベール著「ポーランド史」文庫クセジュ、1984 年
ドーソン「モンゴル帝国史」東洋文庫（平凡社）2 巻、1968 年
R・マーシャル「モンゴル帝国の戦い」東洋書林、2001 年
J・ウェザーフォード「パックス・モンゴリカ」NHK 出版、2006 年
岡田英弘「世界史の誕生-モンゴルの発展と伝統」ちくま文庫、1999 年
杉山正明「世界史を変貌させたモンゴル」角川叢書、2000 年
熊谷徹「ドイツは過去とどう向き合ってきたか」高文研、2007 年
共同通信編集委員・森保裕「続く若いプロセス」（2015 年 1 月 19 日配信記事）
三島憲一「戦後ドイツ」岩波新書、2014 年
J・ジャレド・ダイヤモンド「銃・病原菌・鉄」上下、草思社、2001 年
香川檀「想起のかたち 記憶アートの歴史意識」水声社、2012 年
山下文男「津波てんでんこ」新日本出版社、2008 年
河田恵昭「津波被害」岩波新書、2011 年

図版

- 写真 1 クラクフの祭りに登場するライコニク ポーランド政府観光局 HP
パブリシティー用写真ギャラリーより
写真 2 T4 作戦のモニュメントを見るスイス女性 撮影：三上、2014 年
写真 3 「つまずきの石」 撮影：大西利尚共同通信ベルリン支局長（当時）、2014 年
個人で撮影された写真をご提供いただいた

著者連絡先；三上 喜美男（Kimio Mikami）

名古屋市立大学 22 世紀研究所

〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1

E-mail: mikami-km @ kobe-np.co.jp （使用時@前後のスペースを除去して下さい）

Published online; December 1, 2016